

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月7日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520476

研究課題名（和文）アクセント体系変化後の定家仮名遣いの研究

研究課題名（英文）Teika-kanadzukai, after the change of the accent system

研究代表者

坂本 清恵（SAKAMOTO KIYOE）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：50169588

研究成果の概要（和文）：

アクセント体系変化後の「定家仮名遣い」は、アクセント変化前のアクセントに拠る文献に残された仮名遣いを継承している。大野晋は、行阿は自分のアクセントで仮名遣いを決めたとしたが、行阿は体系変化後の生育で、行阿も文献による「定家仮名遣い」であった。つまり、アクセントに依拠するという定家の仮名遣いの原理は伝わったが、体系変化後に実践した人は「定家仮名遣い」を批判した長慶天皇などごくわずかであった。

研究成果の概要（英文）：

After the change of accent system, “Teika-kanadzukai” succeeded to the kana orthography based on the former accent (the accent before the change of accent system) shown in various literatures.

Susumu Ono thought Gyoa wrote with the kana orthography based on his own accent, however, Gyoa was born and grew up in the times after the change of accent system, therefore, his kana orthography was not based on his own accent but on the accent shown in the literatures reflected that used in the Chikayuki (his grandfather)’s times.

That is, the principle of “Teika-kanadzukai” that based on the accent, was well understood, but after the change of accent system, the most people used the kana orthography shown in the literatures, and only a few used the kana orthography based on his own accent. One of the latter examples was Emperor Chokey who criticized “Teika-kanadzukai”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：定家仮名遣い・アクセント仮名遣い・「仙源抄」・耕雲・長慶天皇・行阿・

アクセント体系変化・「原中最秘抄」

## 1. 研究開始当初の背景

定家仮名遣いの原理については、大野晋(1950)により「お」「を」についてはアクセントによる仮名遣いであることが明らかにされ、それを引き継いだ『仮名文字遣』所載語の仮名遣いとアクセントとの関係については、編者行阿の時代には平安末・鎌倉時代にLL・LLLであった語が「を」で書かれ、HL・HHLへのアクセント変化を反映しているが、LLHであったものは「お」であり、HLLへのアクセント変化は起こっていなかったとされた。すなわち、『仮名文字遣』にはLLL>HHLの変化が早く、LLH>HLLの変化が遅かったというアクセント体系変化の遅速が反映しているものとされ、それが学会の共通理解のように扱われてきた。

しかし、その後のアクセント史資料研究が進み、金田一春彦、秋永一枝、桜井茂治により『仮名文字遣』によって遅速については論じることが妥当ではないことが明らかになってきた。また、遠藤和夫(1976)は『仮名文字遣』の表記が文献に拠っていることを主張、アクセントによらない部分もあることを福島直恭(2009)も指摘している。新たに構築されたアクセント史資料に基づいて、アクセント体系変化との関係を主眼にした『仮名文字遣』の研究がなされていない状態であった。

また、定家仮名遣い批判の研究としては、前田富祺氏、望月郁子氏ほかにより、長慶天皇の『仙源抄』跋文に示された声点および声調をもとに明らかにされている。それは、長慶天皇が定家のアクセントによる仮名遣いを批判したのは、長慶天皇の生まれが1343年で、このころまでにアクセントの体系変化が起こっていたこと、アクセント観が新しいものになっていったことが関係するということである。しかし、これまでの研究は跋文についてのみで、実際に長慶天皇がどのような仮名遣いで『仙源抄』を記したのかについてと、本文中の差声については言及が皆無であり、アクセント体系変化後の定家仮名遣いとアクセントとの関係についてその実態に関する研究はほとんどなわれていなかった。

## 2. 研究の目的

いわゆる定家仮名遣いのうち声調(アクセント)によって書き分けられた「お」「を」を含む語は、アクセント史資料ともなる。しかし、南北朝に起こったアクセントの体系変化と声調に対する意識の変化により、定家時代の仮名遣いと変化後のアクセントによった仮名遣いでは相違が生じ、定家仮名遣いに対する批判が起こる。当該研究では、これま

で具体的な研究がなされてこなかったアクセント体系変化後の「定家仮名遣い」の実態を明らかにし、アクセント資料としての可能性を探るとともに、アクセントに拠ることのない「定家仮名遣い」がどのように構築され、浸透していくのかの解明を目的とする。

「定家仮名遣い」の書として伝播する『仮名文字遣』の実態と、「定家仮名遣い」の批判の書とされながらも、アクセントによる仮名遣いを実行したと思われる『仙源抄』の分析を行いつつ、体系変化後の定家仮名遣いの享受の実態を解明する。

## 3. 研究の方法

### (1) 『仮名文字遣』編纂方針の解明

これまで行阿の『仮名文字遣』は、定家仮名遣いの辞書的役割を持つ本として理解されてきたが、その編纂方針には実はアクセントによる仮名遣い書であることが全く書かれていない。後世の定家仮名遣いを批判する『仙源抄』や、契沖の『和字正濫通妨鈔』などの書物で、アクセントによる仮名遣いを具体的に非難することによって、『仮名文字遣』がアクセントによる仮名遣い書であると認識されている可能性がある。『仮名文字遣』が二つの基準で仮名遣いを示していることが明らかにはなったが、行阿自身のアクセントに拠らない場合には、何を典拠にしているのかを検討した。

### (2) 『仙源抄』以降の注釈書、仮名遣い書における仮名遣いの分析

定家仮名遣いの批判の書として扱われてきた「仙源抄」諸本の研究を行い、本文の仮名遣いの実態解明、差された声点の分析を行い、アクセント体系変化後の仮名遣いを明らかにする。さらに、『仙源抄』の書写者で長慶天皇に仕えていた耕雲明魏の自筆本における仮名遣いの調査を行い、その実態を解明した。

## 4. 研究成果

「定家仮名遣い」の書として伝播する『仮名文字遣』の実態と、「定家仮名遣い」の批判の書とされながらも、アクセントによる仮名遣いを実行したと思われる『仙源抄』などの注釈書の典拠を考察した。これまで具体的な研究がなされてこなかったアクセント体系変化後の「定家仮名遣い」の実態を明らかにし、アクセント資料としての可能性を探るとともに、アクセントに拠ることのない「定家仮名遣い」がどのように構築され、浸透していくのかの解明を目的として研究を進めた。

### (1) 『仮名文字遣』の研究

これまで大野晋氏の研究により、行阿の『仮名文字遣』が定家の仮名遣いとは異なるのは、アクセント体系変化の遅速を反映したためという解釈が定説となっていた。『仮名文字遣』の「お」「を」の使い分けにより、LLL>HHLの変化が早く、LLH>HLLの変化が遅かったとするものである。しかし、これには「おとこ・おほぢ・おほひ」のように使用頻度の高い、LLLである語を除外している点、LLHを保つ語が動詞に限られているという点が見逃されてきた。また、LLHを保っているように見える「お」で書かれる動詞は型の種類が少なく、アクセント変化後も区別がつけられる。さらに、行阿の生育地が鎌倉であると考えられることと、筆者が行ってきた『仮名文字遣』の諸本研究により、『仮名文字遣』の仮名遣いは行阿自身のアクセントに拠ったものではなく、『仮名文字遣』をまとめたときから文献による仮名遣いであることを明らかにした。

## (2) 長慶天皇の仮名遣い

長慶天皇の『仙源抄』はその跋文によりアクセントによる定家仮名遣いを批判したものと扱われてきたが、長慶天皇は『仙源抄』本文執筆では、アクセント体系変化を経た自分自身のアクセントにより「を・お」を書き分けるという「定家仮名遣い」の原理に拠っていることを解明した。

## (3) 『仙源抄』の声点

『仙源抄』に差された声点については、金沢市立図書館、天理図書館、宮内庁書陵部本などの諸本調査を行った。参考にしたとされる『河海抄』『紫明抄』の声点調査も行い、比較検討を進めて、差声と移声の別などを分析した。

長慶天皇が自らのアクセントを差したものと、出典があって移声したのものがあることは分かったが、その判断はむずかしい。注の中には明らかにアクセント体系変化後のアクセントを差したものがみられ、天皇自身の差声と認められるものもある。跋文の解釈で問題とされてきた〈平平〉は、本文の差声からも長慶天皇自身の差声法ではなく、また新しい声点注記法でHLを示したのもでもなく、古い文献に拠ったものとみられる。〈去上〉〈上去〉は天皇の差声としてもよさそうである。同音異義語を平上去で書き分けるために自身の差声法ではない古い差声法も採用しているとみられる。

## (4) 耕雲の仮名遣い

『仙源抄』の書写者である耕雲自筆資料についてその仮名遣いの実態を明らかにすることができた。アクセント体系変化後に生育した耕雲は、書写にあたっては親本に忠実で

あった。『仙源抄』では、アクセント体系変化後のアクセントに準拠した長慶天皇自身の仮名遣いに従い、『原中最秘抄』では、アクセント体系変化前のアクセントに準拠した仮名遣いとなっている。さらに自著では、『原中最秘抄』の事例と同様の仮名遣いがとられていることが分かった。つまり、耕雲の習得した仮名遣いは、自身のアクセントにより書き分けをするものではなく、『源氏物語』の書写などによって触れた文献に準拠する仮名遣いなのであった。それは『仮名文字遣』に近いもので、定家や源親行時代のアクセントに準拠したものに近く、体系変化後のものもわずかに混在している。

## (5) 本研究の結論

アクセント体系変化後においては、「お」「を」の仮名遣いは、当時通行となっていたいわゆる「定家仮名遣い」を用いるのであって、それは定家の頃、親行の頃にアクセントを基準として使用されていた仮名遣いを継承するのが主流であり、自らのアクセントによって新たな書き分けを行うことは稀であるといえよう。アクセントによって「お」「を」を書き分けるという定家仮名遣いの原理自体は伝わっていたが、実践した人はごくわずかであったということである。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

①坂本清恵「『仙源抄』とアクセント仮名遣い:長慶天皇はわかっていた」『国文目白』49. (2010), 36-48, 0

②坂本清恵「浄瑠璃本の単語認定-仮名の用字と清濁について」『論集』6. (2010), 1-24, 0

③坂本清恵「売豆紀神社蔵 養法院筆『古今和歌集』の仮名-その字体と仮名遣いについて」『論集』7, (2011), 9-32, 0

④坂本清恵 「長慶天皇の差声法-『仙源抄』の声点をめぐって」『日本女子大学文学部紀』61, (2012), 41-59, 0

⑤坂本清恵「定家仮名遣い再考-アクセント体系変化後の仮名遣いのよりどころ」『国語国文』81-7, (2012), 1-14, 0

⑥坂本清恵「近世古今伝授資料における声点と胡麻章」『論集』8, (2012), 1-16, 0

⑦坂本清恵「文楽における連声」『国文目白』52, (2013), 41-53, 0

〔学会発表〕(計2件)

① 坂本清恵: "Variations of Regional Accent in the Japanese Puppet Theater" Asian Languages and Literature. (20100513). University of Washington(アメリカ)

② 坂本清恵 「浄瑠璃本の仮名」歌舞伎学会. (20101212). 日本女子大学(東京都)

〔図書〕(計1件)

坂本清恵 『尼御台由比浜出』玉川大学出版部 (2013)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂本 清恵 (SAKAMOTO KIYOE)

日本女子大学, 文学部、教授

研究者番号: 50169588

